

聾学校および聾児の学習・生活環境に関する研究 その1

—デフスペースに関する意識調査—

○今井 計 濱尾 昂史

(筑波技術大学) (三機工業株式会社)

KEY WORDS : デフスペース、聴覚障害、学習・生活環境

1. はじめに

平成18年6月21日、バリアフリー新法が施行され、高齢者や身体障害者が安心して生活できる環境を目標にバリアフリー化が促進された。システム・制度といったソフト面、建物・設備といったハード面共に浸透しつつある。だが、一般的にバリアフリーの対象者は高齢者、車椅子利用者が挙げられやすく、聴覚障害者が挙げられることはないのが現状である。また、聾学校も2007年より正式に特別支援教育の実施が行われた。前述から知的な遅れのない発達障害も含めた対象の拡大から、盲・聾・養護学校を「特別支援学校」に複合化し、現在に至る。しかし、複合化から建物のあり方、環境、教育法の不整合について試行錯誤しているのが現状だと思われる。

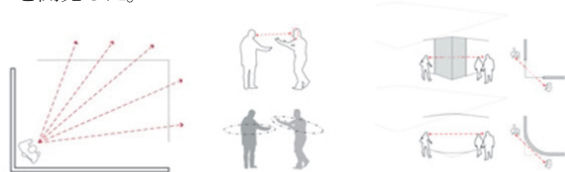
現在、我が国の聴覚障害者自身に合わせた空間作りの概念、普及は乏しい。健常者の文化をもとに作られた建築物に、視覚的情報を補う考え方が一般的である。

2016年4月から障害者差別解消法が施行され、これにより国民が障害者のニーズに合わせた合理的配慮に耳を傾ける、目を向ける環境が整う可能性が考えられる。デフスペースは聴覚障害者の生活のしやすさ・安全面を高め、日常生活でのストレスを軽減させ、より快適な生活を提供できることが可能である。これは聴覚障害者に限らず、高齢者・障害者にも有効であり、高齢化社会が進む日本においては今後の需要が見込まれる。

2. デフスペース

2005年に建築家ヘンゼルバウマン (hbhm アーキテクト) は、ギャローデット大学のASL聾研究科と連携して DeafSpace プロジェクト (以下 DSP) を設立した。

その後5年間で、DSP は DeafSpace ガイドライン、聴覚障害者の経験と構築された環境との間の5の主要なタッチポイントに対処する100以上と50の異なる DeafSpace 建築設計要素のカタログを開発した。



感覚リーチ スペースと近接 モビリティと近接



光と色

音響

上記の5つがデフスペースの根本的な概念であり、これらのカテゴリのすべてに共通することは、地域づくり、視覚言語、個人の安全と幸福のプロモーションのアイデアである。DeafSpaceの研究から、聴覚障害者の空間認識、環境や文化的アイデンティティの具体的な理解を助けると評価されている。

また、2015年に IAUD (国際ユニバーサルデザイン協議会) 地域計画部門で DeafSpace Design Guidelines が IAUD アワード 2015 金賞を受賞したことから、今後の需要が見込まれる。

3. アンケート調査

日本はアメリカに比べてデフスペースに対する取り組みが進んでいないという現状を踏まえた上で、アンケート調査から意識問題、改善案を探った。筑波技術大学産業技術学部在籍する学生を対象に「デフスペース」についてイメージ、日本の聾学校に取り入れるべきか、さらに勉強面で困った事、生活面で困った事、他校と交流があったか、理想の聾学校はどういうものかなどアンケートによる意識調査を行った。

アンケート結果からデフスペースに対するイメージは、広い空間、聾者のための空間と回答した人が多く、特に筑波技術大学産業技術学部を連想する回答が全体の65%を占めた。また日本の聾学校にデフスペースを取り入れるべきという声が全体の75%と高い割合を占めた。勉強しやすい環境になれば学力向上につながる、デザイン的にもおしゃれで万人に向けたスペースになりうる、健聴教員との会話、子供たちの安全を見守る環境がほしいといった前向きな意見が多かった。さらに廊下の角でぶつかる、ガラス張りの開放的な空間、皆が集まれるスペースが欲しいという意見が多かった。デフスペースを取り入れた聾学校のモデル案を提案することで、デフスペース普及に結びつける。次報では実際に現状を把握した上で、デフスペースを取り入れた聾学校のリノベーション案を報告する。

(IMAI Hajime, HAMAOK Takafumi)